花畑のある風景（I）

伊達市　大井伸一

この頃、山草の雑草とりや消毒が出来ないでいる。なかなか増えない在来タンポポ（エゾタンポポ、シロバナタンポポ、ユウバリタンポポ、オダサムタンポポ等）がコケモモの鉢やそのほか植えかえのあまりしていない鉢から芽を出したり、コアニチドリ（道産もの）、ウチヨウラン、スズムシソウ、クモキリソウ、モチズリ、などの蘭の仲間たちが芽を出して、いかにも気持よさそうに花を咲かせたりすると、もう雑草をとる気持にはなれない。目にとまった草の中になにかが芽を出したりすると、もしもなにかがひようとすると…と思うともう出来ない。(…と云うものの多少は雑草とりが億劫になっている言訳も多少ある。) 故阿保精一氏の花園の雑草が風に靡いていたことも頷かれる。

それにもうひとつ困ったことには消毒が出来ないことである。昨年文献に出ていなかった蛾の食草を見つけたりしたのでなおさらのことである。わけのわからない毛虫、イモ虫を見つけると、果たしてどのような蝶や蛾になるのであろうかと思うと、薬をかけて殺してしまう気持はなくなってしまう。

そのような思いをよそに、彼等は愛すべき植物をかたっぱしから食いあさる。あげくの果てには、花も見られず葉も残さず植物のかげすらなくして何処かに逃げ去っていくのである。この正体不明の悪業？はしばしばであった。

それにもめげずわが花園は四季折々には、多少の差はあるが花は見られる。昼間には、シータテハ、コムラサキ、ヒオドシチョウ、キアゲハ、ミドリヒョウモンチョウ、カバイロシジミ、トラフシジミ、ツマキチョウ、スジグロチョウなど、数10種類の蝶たちや、夜間電灯の下には、オオミズアオ、クスサン、ベニシタバなどの ctocra と云われる蛾の仲間や、翼を金・銀に光らせている宝石のようなキンウワバという蛾やその他数多くのシャクガやメイガが賑やかに飛来する。高野英二氏は、「花と蝶はつきものですから…」とよく云われるが、その言葉を思い出して１人悦に入っている。

もしも、わが家に来られたならば遠慮なく花園を覗いて見てください。因みにサトイモの仲間であるコウライテンナンショウ、ユキモチソウ、ウラシマソウを食べている、一見して蛇のような気味の悪い虫を見つけたら一頭ぐらい殺さないでください。それは美しいピンク色の羽根をしたベニスズメという蛾の幼虫です。窓にとまった姿はピンク色のジェット機のようです。「みにくいアヒルの子」の物語のようです。

そして今年はホテイアツモリソウの花を食べて、ホテイアツモリソウ色に染まって丸々に肥ったイモ虫がどんな成虫になるのか解明しようと思っている。